航空ファン

THE KOKU-FAN

★創刊20年記念

WIDE COLOUR

川崎 5式戦闘機



特集

特写・カリフォルニア州空軍のF-102A

可変翼機を考える・その有用性の分析

60用双発スケールR/C機 三菱キ83

'72 NOVEMBER 11

$230





SR-71 "ブラック・



ベトナム作戦用に20mm機関砲4門と7.62mmミニガン4門を装備したハーキュリーズの近接支援攻撃機AC-130A。タイのウボン基地に駐留している第8戦術戦闘航空団（8th TFW）第16特殊作戦飛行隊（16th SOS）に配備されている1機。側面の窓から機関砲の砲身が出ている。サーチライト、センサーや赤外線探知装備なども積んでおり、胴体下にレーザーのイルミネーター、側面には…などが張り出している



上 [illegible] ページ上 [illegible] 348戦術戦闘飛行隊 [illegible] のF-4E [illegible] のテイルレター 右ページ上も [illegible] F-4E [illegible] KC-13[illegible] 写真 [illegible] 塗装 [illegible]





[illegible] ロダンダント タイガー [illegible] の部分は部隊カラーで塗りつ[illegible] 写真 [illegible]





米空母オリスカニの搭載機



去る8月初めに横須賀に寄航した米空母オリスカニ（CVA 32）の艦載機。これは同艦を離れて厚木基地で訓練中のものである。
（左ページと下）第194戦闘飛行隊のF-8J クルーセイダー。この部隊のF-8Jは、ちょうど1年前にも来日しているが、尾翼のレッド・ライトニングのマークは、ごらんのようにテイル・レターがかぶって描かれるようになって、当時とはちょっと変っている。下の写真の機体は機首に蛇のマークを描いている。
（上）第155攻撃飛行隊（VA-155）のA-7A コルセアII。この部隊は1年前とほぼ同じマーク。なお、コルセアIIのマーキングは、次ページ以降、まとめて紹介することとしよう。





A-7コルセアIIマーキングのバリエーション。空母オリスカニーの搭載機を中心に、レムーア海軍基地やデビスモンサン空軍基地で撮影したコルセアたち。多彩なマーキングをおたのしみください。〔上〕第215攻撃飛行隊のA-7A。オリスカニーで来日、厚木基地で休養中。〔下〕空母エンタープライズに配備されている第97攻撃飛行隊機。レムーア基地にて。





（上）第153攻撃飛行隊（VA-153）のA-7A [illegible]れもオリスカニーで来日した[illegible]機で　厚木基地で撮影　尾翼のブルーのマークは　以前[illegible]くらべて　やや違ったものになっている。（下）同じくVA-153 ブルー・テイル・ファイズ　所属機で[illegible]あるがCVW-16（第16空母航空団）の司令官機である。レムーア海軍基地で撮影　(Photo by Mr. Roy Lock)





（上）カリフォルニア州ポイント・マグー基地のネーバル・ミサイル・センター所属のA-7A 同基地にて本誌記者が撮影
（下）第113攻撃飛行隊（VA-113）のA-7E この飛行隊の各機は1970年から翌年の6月まで空母レインジャーに配備されて、ベトナム戦に参加、出撃したこともある。これはレムーア海軍基地で撮影したもの。機体のマークは以前のまま







このページ2枚は空軍のコルセアII （上）アリゾナ州ツーソンのデビスモンサン空軍基地で撮影したA-7D 第355戦術戦闘航空団（355th TFW）第40戦術戦闘飛行隊（40th TFS）の所属機である 機首の般若（はんにゃ）のマークに注意 （下）現在マートルビーチを基地としている第354戦術戦闘航空団（354th TFW）第356戦術戦闘飛行隊（356th TFS）のA-7D。同飛行隊は日本に駐留していたこともあり 40TFS機と同じく般若の面をマークしている テイルレターは MN （LTV Photo）







スカイ[illegible]エア・ディ[illegible]プレイ

([illegible]AME AIR [illegible])





スカイフォーム エア ギャラリイは 個人 の 収集 ある して 航空博物館 個人が有の 空博物館として 世界 もの一つである

〔左ページ〕屋外に展示されている木製の爆撃機モスキート の機体は映画 633爆撃隊 に使われており 機体の塗装はそのときのままである 〔上〕同じく屋外の展示機で アブロ ヨーク輸送機 の機体 ベルリン空輸作戦 使用されたものである 〔下〕アブロ ヨークの後継機として英空軍に採用された ハンドレページ ヘスティング輸送機 ベルリン大空輸作戦で活躍した機体である





飛行テスト中のF-15

エドワーズ空軍基地を飛び立って飛行テスト中のF-15原型1号機。F-14Aの原型と同じように、各翼の先端や機首付近を赤く塗ってのテスト飛行。1号機は去年7月27日同基地で初飛行して以来、第1段の2週間の飛行テストを、予定よりも1週間も早く終えるという順調な経過をたどっており、これまでに約20回の飛行を終えている。マクダネル・ダグラスのセントルイス工場では、原型2号機もすでにロールアウトしており、まもなくエドワーズに運ばれて、飛行テストに参加することになっている。



1.2. P-38J OF 55TH FIGHTER SQDN 20TH FIGHTER GROUP 8TH A.F. MAMA'S BOY

③ P-38J OF 55TH FIGHTER SQDN 20TH FIGHTER GROUP 8TH A.F. "JEAN"

4 P-38J OF 79TH FIGHTER SQDN 20TH FIGHTER GROUP 8TH A.F. GENTLE ANNIE

⑤ LETTERS ON THE FIGURE 4 AIRCRAFT

2 [illegible]

3 [illegible]

4 [illegible]

5 [illegible]









©K.Hashimoto

ロッキード P-38J ライトニング

LOCKHEED P 38J LIGHTNING

1939年1月に初飛行した高高度迎撃兼長距離戦闘機で「双胴の悪魔」の異名をもつ。第2次大戦中でもっとも有名な戦闘機のひとつに数えられる。

原型機XP-38から最終型のP-38Mに至る多くの型があって、合計9,923機という多数のP-38が生産され各戦線で活躍。太平洋戦線では連合艦隊司令長官 山本五十六元帥の搭乗していた1式陸攻を撃墜した戦闘機としてもよく知られている。

☆キット紹介☆

レベルの1/32シリーズにP-38Jのキットがあって発売中。このシリーズ中最大のビッグ・モデルで、例によって精巧なコクピットとエンジンを内蔵している豪華版。可動部は常識的な車輪とプロペラのほか、キャノピーのハッチが開閉式になっている。各部のパーツもシャープで精密彫刻も入念になされており、誰にでも簡単に組立てられ、しかもビッグな仕上りを示す。

デカールは有名な40機撃墜のエース、ボング少佐機と第9空軍第370戦闘大隊第485戦闘中隊機および、フラガールのマークつきの第5空軍第475戦闘大隊第433戦闘中隊機の3種6形態。全面シルバーの機体と特殊な塗装であるブルーとシルバーの機体の2ヵ、派手なインベイジョン・ストライプス付きでオリーブドラブ塗装機も作れるという楽しみがある。モデルの全幅49cm、全長36cmという大物である。この定価は1,000円。例によって組立説明図と大型カラー図が附属している。

☆塗装について

図1と2 第8空軍第20戦闘大隊第55戦闘中隊機で、機体は無塗装のシルバー⑧。胴体と主翼に白と黒のインベイジョン・ストライプスがあり、機首とエンジン前部が白と帯入り。光線反射よけはアンチグレア・グリーン⑤+④~⑦。機首のマークは黒丸でMAMA'S BOYの黄色の文字があり、一部黒フチつき。中央のマークは確認できない。国籍マークは白くなく特種タイプである。

図3 図1と同じ55戦闘中隊の所属機で、機体の上面側面がオリーブドラブ⑫、下面はニュートラルグレー⑬の塗装。シャークの口は赤と白。主翼翼端のR-KI三角マークとも白となっている。

図4 第8空軍第20戦闘大隊第79戦闘中隊の所属機で、機体はシルバー⑧、光線反射よけは図1と同ようのアンチグレア・グリーン。機首にGentle Annieの文字（図5）があり、文字の上にカギ十字（白丸に黒）5個があり、文字の下にも5個の同じ撃墜マークがある。 （K. Hashimoto）

P-38Jデータ (technical data)

全幅 (span) 15.85m 全長 (length) 11.53 全高 (height) 3.00m 全備重量 (gross weight) 9,800kg 発動機 (engine) アリソン (allison) V-1710-89 (右 Starboard) + 1710-91 (左・port) 1,425HP×2 最大速度 (max speed) 666km/h 実用上昇限度 (service ceiling) 13,400m 巡航距離 (normal range) 4,200km 武装 (armament) 20mm×1 12.7mm×4 乗員 (crew) 1

This is the high altitude interceptor/long range fighter which made its first flight in January 1939. Nicknamed the "Twin boom Devil", this aircraft is known as one of the most active fighters during WWII. A total of 9,923 P-38's, including the first XP-38 model and the final P-38M model, were produced. This aircraft is the one which shot down the attack bomber G4M "Betty", the plane of Adm. Isoroku Yamamoto, the Japanese Combined Fleet Commander in the Pacific theater.

KIT

The new P-38J model kit is making its appearance as the biggest kit in the Revell 1/32 series. Besides the precisely designed cockpit and engine, this kit's mobility is far beyond that of ordinary kits. In addition to the movable wheels and propellers, the canopy hatch freely opens and closes. However Revell skill made it possible even for beginners to easily assemble this kit, with its elaborately designed parts and splendid finish. Decals included are those of Maj. Richard I. Bong, an ACE who shot down 40 planes, the 485th Fighter Squadron, 370th Fighter Wing, 9th Air Force, and the 433rd Fighter Squadron, 475th Fighter Wing, 5th Air Force.

Model kit fans can enjoy many painting variations such as total silver, blue and silver, or olive drab with flashy invasion stripes. Fans will find that the ¥1,000 price is reasonable considering the dimensions of this kit—49cm in width and 36cm in length. A large color picture and painting instructions are also included.

PAINTING

Figs 1 & 2. This belonged to the 55th Fighter Squadron, 20th Fighter Wing, 8th Air Force. Totally painted in metal silver, Revell Color 8. Upon the fuselage and wings are black white invasion stripes. The nose and the front part of the engine have a white band. The shade is RC-5, 4 and 7 anti glare green. The mark on the nose is black, and letters "MAMA'S BOY" are yellow. Partially encircled in black. Impossible to confirm the mark in the center. The nationality mark, not white, is of special type.

Fig. 3. This also belonged to the 55th Fighter Squadron. The top and sides are RC 12, olive drab. The lower surfaces are RC 13 neutral grey. The mouth of the shark is red and white. Main wing tips letters of "R KI" triangle marks are all white.

Fig. 4. This belonged to the 79th Fighter Squadron, 20th Fighter Wing, 8th Air Force. Totally RC-8 silver. Anti glare green for the shade like that of Fig. 1. Letters on the nose read "Gentle Annie" (ref to Fig 5). Above and below the letters are seen five pieces of swastika (black in white circle) respectively showing the number of aircraft they shot down in combat. (K. Hashimoto)

P-38Jの塗装に必要なレベル・カラー	
①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑤グリーン
⑦ブラウン	⑧シルバー
⑫オリーブドラブ	⑬ニュートラルグレイ
⑯フラットベース	⑰艶つや消し



ロッキードP 38K戦闘機　K型エンジン[illegible]を換装し[illegible]の幅の広いプロペラを付けて性能向上をねらったものだが生産はされなかった。機体の塗装は上側面オリーブドラブ、下面ニュートラルグレイの標準塗装で、スピナはオレンジイエローのようである。試作機であるため、胴体に[illegible]ナンバーが書かれているほかは特別な識別記号その他は書かれていない。



ロッキード P-38 ライトニング

去る5月[illegible]したプ[illegible]ントンで開かれ[illegible]に参加したP-38ライトニング [illegible] 大戦機 [illegible] ファンを[illegible]

CURTISS P-40E~N WARHAWK/KITTYHAWK

Revell

1.2 P 40N OF 89TH FIGHTER SQDN 80TH FIGHTER GROUP 10TH A F BURMA 1943
3 P 40E OF 79TH PURSUIT SQDN WITH THE WHITE CROSS MARKING OF THE 1941 WAR GAMES HAMILTON FIELD CALIFORNIA
4 KITTYHAWK MK Ia OF NO 118 SQDN RCAF









カーチス　P-40E～N　ウォーホーク/キテイホーク

CURTISS P-40E～N WARHAWK/KITTYHAWK

第２次大戦中　連合国　もっとも多く使用された戦闘機のひとつであるP-40は1938年10月に初飛行　最終生産型のP-40Nのほか　数多くの試作型もつくられて　合計13,738機が生産された　シェーンノート将軍の義勇飛行隊フライング・タイガーとしても有名である

キット紹介

レベルのP-40E 1/32スケールのキットは現在フライング・タイガーのデカール付きのものと　アリューシャン・タイガーのデカール付きの２種類が発売中で　前者のキットは中国空軍のマークと米軍のフライング・タイガーの合計３種のデカールが附属　後者のキットはアリューシャン・タイガーの虎の顔のマークが入り　カナダ空軍のものが付いている

キットは両者とも同一構成で　オール可動式となっており　実物同ようのエンジンやコクピットを内蔵　外観のリベットや筋彫りもデリケートな表現で精巧そのもの　P-40Eの特徴を[illegible]表現したすばらしいキットである

塗装について

図１と２　機体の上・側面はオリーブドラブ12で図のようにミディアムグリーン16、18、4の雲形迷彩があり　下面はニュートラルグレー13　ドクロマークは白で口の中が黒

キットはE型なので風防へ枠を追加し　２機のキットを使用して尾部を長く改造するとN型を作ることができる

図３　機体の上・側面はオリーブドラブ12で　下面はニュートラルグレー13の塗装　左主翼上面に国籍マークがあり　その内側に白十字のマーク付き　右主翼下面はUSの文字と国籍マークおよび白十字があり　左翼下面はARMYの文字が記入されている

図４　機体の上・側面はダークグリーン23とダークアース22の迷彩で　下面はアズール・ブルー34、31

RE-Cの文字はグレー　スピナは白　国籍マークは主翼の上下左右にある　(K. Hashimoto)

P-40Eデータ (technical data)
全幅 (Span) 11.38m　全長 (length) 9.68m　全高 (height) 3.76m　全備重量 (gross weight) 4,110kg
発動機 (engine) アリソン (Allison) V-1710-39 (1,150HP)×1　最大速度 (max speed) 538km/h/4,570m　実用上昇限度 (service ceiling) 8,850m
航続距離 (normal range)　武装 (armament) 12.7mm MG×6　乗員 (crew) 1

The P-40 known as one of the most popular fighters for the Allied Forces during WWII made its first appearance in October 1938. The total number produced including the last production model P-40N reached 13,738. It is also famous as the mainstay of the historically known volunteer wing the "Flying Tigers" led by Maj. Gen. Claire L. Chennault.

KIT

Revell is now on sale of two kinds of P-40E kits in 1/32 scale, one with decal of Gen. Chennault's Flying Tigers and the other with decal of "Aleutians Tiger". The former is also attached with decals of the Chinese Air Force and American Flying Tigers, while the latter has a large tiger's face mark and the Canadian Air Force decal.

Mechanically there is no difference between the two. To say nothing of the elaborate engine and cockpit major parts are movable. A delicate touch in rivets and engravings is suggestive of the star fighter during W.W.II.

PAINTING

Figs. 1 & 2. The top and sides of the fuselage are Revell Color 12, olive drab with a cloudy camouflage of RC 16, 18, 1 and 4 medium green. The lower surfaces are RC 13, neutral gray. The skull mark is white while the inside of the mouth is black.

Aircraft kit fans can easily remodel the E-model to N-model by adding a frame to the wind shade and prolong the tail part by using the two E-model kits.

Fig. 3. The top and sides of the fuselage are RC 12, olive drab while the lower surfaces are RC 13 neutral gray. On the upper surface of the left wing are marked the nationality mark and a white cross mark. The lower surfaces of the right wing also has the letters "U.S." the nationality mark and a white cross. On the lower surface of the left wing are also letters "ARMY".

Fig. 4. The top and sides of the fuselage are camouflaged with RC 23 dark green and RC 22 dark earth. The lower surfaces are RC 34, 31 and 1 azure blue. Letters "RE-C" are gray while the spinner is white. The nationality mark is on both sides of the main wings.

(K. Hashimoto)

P-40の塗装に必要なレベルカラー

1 ホワイト	3 レッド
4 イエロー	8 シルバー
12 オリーブドラブ	13 ニュートラルグレイ
16 [illegible]	18 ブラックグリーン
22 ダークアース	23 ダークグリーン
30 フラットベース	31 軍艦グレイ
[illegible] 黒つや消し	34 スカイブルー



カーチスP 40戦闘機 カラーと同じくダレス国際空港で開催された トランスポ72 の展示機。有名なフライング タイガースの塗装にならったもので 上面ダークアースとダークグリーンの迷彩 下面はライトブルーである 尾部にNナンバーと Confederate Air Force Colos P-40 Warhawk の文字が黄色で書かれているほかは ほぼ当時の塗装を再現している。なお 国籍マークはいうまでもなく 青天白日 である。

カーチス P40 ウォーホーク



飛行テスト快調F-15





ボーイング707AWACS
テスト・ベッド

[illegible]







テスト飛行中のノースロップA-9A





フィッターSu-7とYak-28

[illegible]

[illegible] (AFM)





西ドイツ空軍機プロフイル


45





上　ドルニエDo 27D連絡機　ドルニエが戦後開発した7座席の機体。680機が生産されているが、そのうち1/3以上が軍用機として空・陸軍に装備されている。西ドイツ空軍の現在の保有機は70機。本機を双発としたDo 28も4機装備している

下　ピアジオP 149D連絡機　本機はイタリアのピアジオ社がP 148をもとし改造した機体で、西ドイツ空軍では1955年に連絡・練習機として制式採用。フォッケウルフ社でライセンス生産しており4座席も設けられる。基本飛行訓練機は2座席。260HPのライカミングGO 480エンジン装備



カリフォルニア州航空隊の F-102

本誌特写



F-102 DELTA DAGGERS OF CALIFORNIA AIR NATIONAL GUARD



上　下　※上）同じく第　戦闘グループのF－102A　カ」フォルニア州航空隊では、オンタリオ　　の第　と　フレノス空港の第　戦闘グループ　　102を装備した迎撃戦闘部隊である





カリフォルニア州航空隊は，F-102迎撃機を装備した戦闘飛行隊と，C-97の空輸部隊や2個飛行隊それに，C-97その他を持った特殊作戦部隊の一個飛行隊の編成である。F-102の両グループは，第144防空ウイングの傘下にあるが，1954年以来，州航空隊の防空部隊は防空軍団（ADC）の指揮下に入って，アメリカ本土防空体制の一翼をになっており，両グループとも2機のF-102Aを常時スクランブル配備につけている。機材はもちろん劣るが，州航空隊とはいえ本土防衛の任務は正規軍と変らず，その3分の1を受けもっている。

下　同じく第163グループのT-33A練習機



厚木のオリスカニ搭載機



▲46年8月初め，整備と休養のために横須賀い寄港した米空母オリスカニ（CVA 34）は２週間ほど滞在して出港したが，これは厚木基地に機を休めるその搭載機の一部。

① F 8Jクルーセイダー，赤いダイアのマークをつけた第191戦闘飛行隊（VF 191）サターンズ・キャッテンスの所属機。









オリスカニの搭載機は ちょうど1年前にも本誌（昨年11月号）で特集しているが そのころとくらべて機種はほとんど変りもなく 部隊マークにわずかな変化がみられるのみ。
②④⑤F-8Jクルーセイダーで 第194戦闘飛行隊（VF-194）の所属機。テイルレターNMの真中をつらぬいてライトニングのマークが描かれているが 以前はこのマークは文字の上方に描かれていた。③⑥A-7Aコルセア II 第153攻撃飛行隊（VA-153）の所属機。この部隊のブルーのマークも、以前より線がやや濃くなっている。

①



③

⑥







⑦ＥＥ－１Ｂトレイサー 早期警戒機 第１早期警戒飛行隊（ＶＡＷ－１１）の所属機。主翼を後方に折りたたんでいるが エンジンを始動して発進するところ

⑧ＳＨ－３Ｄヘリコプター 第１対潜支援ヘリコプター飛行隊（ＨＳ－ ）の所属機 これもまもなくスタート 各機とも休暇中と えども訓練飛行はおこなわれつづけている



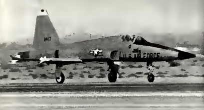


ピパー・オンター・ゲット ②

Pipper on Target　　小松基地のF-86F 競点射撃



フォート ニュース



ノースロップF-5E "タイガーII" の1号機が 去る8月11日, エドワーズ空軍基地の米空軍フライト・テスト・センターで初飛行した。ノースロップの主任テスト パイロット ハンク チョートー氏の操縦で30分の飛行をぶじに終えたが これは予定よりも4カ月も早い初飛行であった。写真は同センターを離陸するところ。





(上) これも5月30日に初飛行して以来 エドワーズ空軍基地で飛行テストがつづけられているノースロップA-9A原型1号機。飛行テストの合い間に整備中のところである。機首のブームに付けられている円盤状のものは 精密な計器の狂いを防ぐためのもの。目下のところエドワーズ空軍基地は F-15A, B-1A, A-10A それにF-5Eと原型の1号機がいっせいにテスト中であり 新鋭機がいっぱいである。





〔上・左・下〕 このほど催されたソ連の空軍デーで　編隊飛行などを見せたスホーイ5u-7形戦闘爆撃機とパイロットたち。上と左は飛行を終えたところで　この機を飛んだパイロットたちは　部隊の選りぬきの者ばかりである。

下はドラッグ・シュートを引いて着陸するSu-7形。主翼下にはロケット弾ポッドを吊している。本機が初めて公開されたのは1956年のツシノ航空ショー　その後ソ連空軍の主力戦闘爆撃機となりキューバ・チェコ・エジプト・東ドイツや北ベトナムなどにも供与されている。後退角約60度の主翼には　中央部と翼端の内側に境界層板が付けられており　同主翼付根は30mm機関砲を装備している。

(TASS)







〔上〕6月27日に、マルセル・ダッソー ブレゲー社のツールーズ工場で引渡された、イタリア海軍用のブレゲー1150アトランチック哨戒機1号機（右端）。イタリア海軍では本機を18機発注しており、[illegible]機までに全機が引渡されることになっている。

〔左〕去る6月2日 マルセイユ～マリーアン間のアエロスパシアル社飛行場で初飛行したSA360ヘリコプター。SA360はSA341ガゼルを大型化したもので 10人乗り。

〔下〕地上滑走テストを開始したA300Bエアバスの原型1号機。ツールーズにて原型4機の製作が進められているA300Bは、すでに2、3号機も最終組立てに入っており、写真の1号機は11月中頃に初飛行の予定である。







（上）オルリー空港で空港施設への適合性をテスト中の近距離旅客機ダッソー・ブレゲー メルキュール原型1号機。メルキュールの原型1号機は すでに第1段の飛行テストはすべて終っており 最大速度マッハ[illegible]で飛行している。ダッソー・ブレゲーのイストル工場では量産1号機の組立ても始められていて 来春までに型式証明を取得する計画をたてている。

（右）オーストラリアの政府航空機工場（GAF）がオーストラリア軍用に開発しているN22原型2号機。本機はアリソン250 B17エンジン双発のSTOL機で 今春初飛行 これまでに 200時間以上の飛行を記録している。[illegible]の多用途軍用機がねらいだが いまのところ [illegible]約25万余ドルの見込みという。

スナップ だより



〔上〕8月初め 空母ハンコックから厚木基地に飛来したF-8Jクルーセイダー。第24戦闘飛行隊の所属機（一宮市 徳永克彦）。
〔右〕航空自衛隊のF-4EJの4号機が完成してテスト飛行をつづけている。小牧飛行場にて撮影（東京都 北浜則彦）。
〔下〕国籍し"発祥海軍"と書いた米海軍のC-117D輸送機。7月末厚木基地にて。同機は台北から飛来したもの（愛知県・鵜飼貴雄）。





〔下〕SONYが購入したセスナ サイテーションが日本に到着 各地をデモンストレーションフライトしたのち 去る9月… 羽田の東京国際空港でSONYに引渡された 9月… 日 同空港にて撮影（… 井上哲也）





5式戦闘機

KAWASAKI KI 100 FIGHTER

Ki.100 later versions of No.5 SENTAI sta... Air Field

(Saito)



(前ページ) [illegible] 清州飛行場を基地に本土防空に活躍した飛行第5戦隊の川崎 [illegible] 戦闘機(キ100)。[illegible] の水滴型風防とした [illegible] である。[illegible] は車輪止めを [illegible] の [illegible] などその [illegible] がよくわかる。

Ki 100 of No.59 SENTAI 3rd CHUTAI and other Japanese fighters awaiting destruction on the apron of Omura Air Field Kyushu Autum 1945
Note the background aircraft, later version of Ki 100 with all-round vision canopies









このページ3枚は、103ページと同じく清州飛行場で任務についている飛行第5戦隊の5式戦闘機。2式複座戦闘機を持ってB-29の迎撃にあたっていた第5戦隊が、5式戦を装備したのは昭和20年5月。飛燕の液冷エンジンを三菱製の空冷エンジンにかえて高性能を発揮した5式戦。大いに期待されたが、東海地方の大空襲で三菱の発動機工場が壊滅。飛行第5戦隊に配備された5式戦は33機にすぎなかったといわれる。左と下の写真とも、水迷彩防いした5式戦。戦況がひっぱくし、内地の防空戦闘部隊であるが、すべて戦地部隊の白帯を巻いている。

(Photos by Mr N Saito)





このページも清洲飛行場の飛行第5戦隊所属の5式戦闘機　下の写真はエンジン始動中の隊長機で　手前の4機は戦地帰還をつけていないのに注意。あわただしい戦争末期のことで　日の丸の描き方や[illegible]の種の機番は記[illegible]されていなかった　前ページ下の写真でもわかるよう[illegible]　同戦隊の戦隊標識は垂直尾翼　見えるローマ数字のVを図案化したもの。左側面は機番号の前[illegible]　右側面は機番号のうしろ　ともに白で描いてあった。

Ki 100 Fighters of No.5 SENTAI. Thity nine Ki 100 Fighters were delivered to No 5 SENTAI at Kiyosu Air Field and they took an active part in the defence of the homeland until end of the war



未発表 陸軍機写真集

浜松陸軍飛行学校

HAMAMATSU ARMY FLYING SCHOOL





...tsubishi Ki 21-I Type 97
...hiki 1 Ko Heavy-Bombers
of Hamamatsu Army Flying

重爆撃機操縦者養成のため設けられた浜松陸軍飛行学校　今回はその保存機であ[illegible]。上：97式重爆撃機（キ21）と中島100式重爆撃機（キ49）「呑龍」によって、敵滞先生のすばらしい写真が伝える在りし日の情景である。

（69ページと上）広いエプロンに並んだ97式重爆I型　全機ともエン[illegible]ールさせており、整備途中のものである。[illegible]（69ページでは手前から4機目、上では4列目[illegible]）機だけ迷彩の機体も混っている。尾翼には[illegible]を図案化した同校のマーク、機首側面に書かれている数字は機番号である。93式重爆の後継機として現われた100式重爆は、初めて[illegible]を採用した陸軍では最初の近代的な爆撃機。日華事変の中期にデビュー[illegible]戦[illegible]まで統一機種として活躍した。[illegible]最初の生産型甲と尾部に遠隔操作の機銃を新設した乙型があったが、[illegible]の写真の機体はほとんど甲型である。

下：海岸線を行く97式重爆I型乙。乙型は尾部に7.7mm機銃を装備したほか、水平尾翼の面積を大きくし、翼付け根と滑油タンクを防弾にするなどの改造も施されている。





（上）ある中隊の100式重爆呑龍（キ49）重爆。陸軍の主力重爆として造られた本機は、はじめて尾部銃座を設け、ファウラー・フラップを採用、銃架も新考案のものとして防弾板をつけるなど新機軸をもり込んだ中島の野心作であったが、高空性能に難があり、爆弾搭載量も97式重爆とくらべてそれほど多くなく、4式重爆飛龍が出現するまでのつなぎ的存在であった。それにしても日本の屋根、中部地方の山岳上空を行く堂々の編隊は、まさに空を圧する威容である

（下）操縦席の天蓋を左右に開いて発進中。ファウラー・フラップが下げられている







Nakajima Ki 49 Type 100 Heavy Bombers of Hamamatsu Army Flying School flying over the mountain chain of central Japan, Dec 1943.





Ki.49 Model 1 of Hamamatsu Army Flying School. Ki 49 was the first Army Heavy Bomber installed tail turret of a 7.7mm gun

前ページと同じく飛行中の100式重爆撃機。テーパー比の大きな97式重爆の主翼にくらべて、広くて短かく、翼幅を大きくした中央翼と特徴のある主翼の形がよくわかる。機体の塗装は、操縦席後方とエンジン・ナセル内側のアンチ・グレアの黒以外は無塗装の銀

スピットファイアの戦闘記録

（その15）



今回からまスピットファイアの写真偵察型をご紹介することにしよう。

（上）PR Ⅶ（7） PR Ⅶは、MK Ⅴ（5）を改造した写真偵察型。同じくMK Ⅴの武装をはずしてカメラを積んだPR Ⅳ（4）の武装型ともいえるもので、F24カメラを垂直と斜め方向に2台積んで、7.7㎜機銃8挺の"A"武装をして[illegible]。PR Ⅳは229機が生産されて、[illegible]の写真偵察[illegible]として活躍[illegible]。PR Ⅶは40機ほど生産されたにすぎない。

写真偵察型は標準型と区別するため、アルファベットの呼称にしたが、PR Ⅶは タイプG、アルファベットの7番目の文字ということで[illegible]型と呼ばれたが、FⅦやHFⅦとは系統が異なっている。写真の機体X4786は、MK Ⅰとして生産され、MK Ⅴに改造されて、さらにPR Ⅶとなったもの。

（下）PR Ⅹ（10） MK Ⅸ（9）の写真偵察型であるPR Ⅺ（11）のエンジンをマーリン[illegible]から77にかえて操縦席を与圧にしたのがPR Ⅹ。部隊に配備されたのは1944年5月で、翌年9月には退役されており、現役期間のもっとも短いスピットでもあった。





〔上〕前ページ下と同じくPR X。本機が経過に終ったのは、実戦でテストした結果、ほぼ種の偵察任務に[illegible]航続の性能が不足とされ、気密していないから機構上もわずらわしかったためと思われる。

〔下および右ページ3枚〕PR XI（　）。MK IXの機体を改造して、PR Vと同じくF8カメラ2台かF24またはF52カメラを[illegible]ずつ積む3種類の装備ができるようにしたのがPR XIである。

MK IXをもとに471機が造られている。燃料タンクを大きくしたため、MK IXの胴体と比較すると機首が下に張り出した形となり、後期のものは写真のようにコードの広い先端のとがったラダーを付け、尾輪も引込式となっている。

471機のうち369機は、戦争地用として海外で作戦。アメリカ陸軍空軍にも6機が装備された。戦後の1948年まで制式機として活躍、その後[illegible]3機が移籍され、一部はギリシャ空軍やオランダ、ノルウェー空軍などでも使われている。

下の写真の機体はオランダで作戦中のもので、雪の滑走路に敷くワイヤー越しに撮影したもの。右ページ上の写真では、後部胴体下に垂直カメラ用の撮影窓が二つあけられているのが目立つ。













〔上・左・下〕前ページと同じくPR XI。尾輪は引込式になっているが、まるいラダーの初期の型である。前ページの機体に装備されている前部胴体下の熱帯用気化器吸気口は上と下の写真の機体にも見える。
なお、上の写真の機体EN654は1943年10月から1945年5月まで第 [illegible] 偵察中隊に装備され、戦後は郵便飛行用機に改造されている。





大戦中，BOACは数多くの軍用機の改造型を装備して，兵員の緊急輸送や郵便飛行などに当たった。

（上）ショート・サンダーランドIIIを改造したハイズ(Hythe)クラス飛行艇。BOACでは1942年以来，機首と尾部銃座の機銃をはずし，機体に客席を設けて改造した約[illegible]機のサンダーランドIIIを装備したが，そのうちの29機は「高性能のペガサス」エンジンに換装，さらに民間向きに改造したハイズ・クラス飛行艇として，戦後も使用している。客席は2階建てで16～24席が設けられた。

（下）これも大戦中，北大西洋の定期便に就航して重要な役割りをはたしたリベレーター爆撃機改造機。写真はカナダ・モントリオールのドーバル飛行場にて撮影。

エアラインの翼

BOAC 英国航空 ②



イタリー軍用機写真集



【このページ3枚】フィアットCR.30戦闘機　1932年に完成した水冷戦闘機で、イタリーの主力戦闘機としてCR.32とともに第2次大戦の始まる前後まで使用された。600馬力のフィアットA.30RAエンジンのまわりは美しく整形されているが、胴体は鋼管式で、翼と胴体後部は羽布張りだった。34〜35年にはオーストリア、中国、パラグアイなどにも輸出された。CR.30Bという複座練習偵察機もあった。







〔上〕フイアットCR 33戦闘機。CR 32の発達型でエンジンを700HPのフイアットA 33RC35水冷12気筒のものとし プロペラは2翅から3翅に変更になっていた。武装はCR 32bisと同じ。しかし、本機が完成した1937年には 同じ複葉でも空冷星型エンジンを積んだCR 40やCR 41それに単葉のG.50も完成したので 量産は進められなかった。

〔下2枚〕フイアットCR 42ファルコ戦闘機。









〔上２枚〕前ページ下と同じくフィアット最後の複葉機CR 42 本機は1939年に完成、ただちに生産に入っている。イタリーの戦闘機の好みをすべてそなえた高速で運動性も視界もよい傑作機であったが、実戦では英軍の高速単葉機にさんざんにやられてしまった。

エンジンは840馬力のフィアットA 74R C 38星型14気筒で、脚は固定式にしていた。武装は最初は12.7mmと7.7mmの両機銃1挺ずつだったが、12.7mm 2挺にしたCR 42bis、主翼下面に12.7mm 2挺を装備したCR 42ter、100kg爆弾2発を装備できる戦闘爆撃機のCR 42AS、サーチライト装備の夜戦型CR 42CNやフロート付きの水上戦闘機CR 42などもあった。総生産機数1781機で、大戦勃発前に約300機を保有、イタリーが降伏したときにも113機が残っていた。

写真の機体は1940年11月にイギリスのサフォーク州に不時着して捕えられ、鹵獲された機体である。





〔上・下〕フィアットG.55センタウロ戦闘機 G.50をベースに発達した機体であるが 性能も機能も別機のように精良されている。1475HPのダイムラー・ベンツDB605A-1液冷12気筒で 原型は1942年4月30日に初飛行した。機体は胴体以外は全金属製で 機体の空気抵抗はG.50よりはるかに小さくなり スピードも運動性も良くなっている。生産は1943年春から開始され G.55/0は20mm機関砲2門と12.7mm機銃4挺を装備 G.55/Ⅰは20mm機関砲は4門 12.7mm機銃は2梃だった。しかし量産を始めたときにイタリーが降伏 一部はドイツ軍とともに連合軍の攻撃に参加した。戦後もG.55A戦闘機とG.55B複座練習機が一定数生産されている。



〔左ページ下・下〕フィアットG.50戦闘機 イタリー最初の全金属製単座戦闘機で 原型は1937年2月に初飛行した。イタリーが第2次大戦に参加したときは 本機とマッキMC 200が最新戦闘機で 118機を保有していた。1938年にスペイン内戦に派遣されたが パイロットが密閉式風防は視界が悪いと嫌がったため G.50bis（写真）では 両側に折りたたみ式風防を付けて 上は開いたままのセミ・オープン式風防となった。この機体は1940年に初飛行し 燃料タンクが増設され 胴と主翼が再設計され 垂直尾翼が高く長いものになっている。ほかに複座練習機のG.50B 液冷エンジン装備のG.50V や爆弾フックを付けた機体の戦闘爆撃機G.50bisなどもある

